

エドワード・バーン＝ジョーンズ作《ペルセウス・シリーズ》に見るキリスト教世界
久保美枝（大阪大学）

1875年の春、エドワード・バーン＝ジョーンズ(Edward Burne-Jones, 1833-1898)は、のちにイギリスの首相となるアーサー・バルフォア(Arthur James Balfour, 1848-1930)と出会い、バルフォアから自邸の音楽室を一連の絵画で飾ってほしいという依頼を受ける。この依頼を受け、バーン＝ジョーンズは、ギリシャ神話のペルセウスを題材とした一連の絵画に取り組む。ペルセウス神話を題材とした一連の絵画制作に関して、ウィリアム・モリス(William Morris 1834-1896)による長編詩『地上楽園』(*The Earthly Paradise*)のなかの一詩、『アクリシウス王の運命』(*The Doom of King Acrisius*)がその源泉であるといわれている。

絵画による室内装飾を手掛けるにあたり、バーン＝ジョーンズは、1875年から76年にかけて、一連の絵画の構成とその配置に関する原画の制作をおこなう。この原画は、室内の壁にみだた3枚の板からなるものであり、10場面にまとめられたペルセウス神話のデザイン画が、それらの板上に配置されている。10枚のデザイン画は、構図の定まっていないものから、彩色の施された段階のものまでであるが、1876年に室内装飾の計画が断念されたのか、原画はこの年に未完におわる。室内装飾の計画は断念されたが、この原画をもとにした一連の絵画制作が10年の歳月をかけて行われる。8枚の絵からなる一連の絵画は、原画からさまざまな変更が加わり手がけられたが、この一連の絵画も未完に終わる。

8場面を扱った一連の絵画において、最後の場面となる《不吉な首》(*The Baleful Head*)と題された絵画は、デザイン画の構図に大きな変更が加えられたものである。とりわけこの絵画作品に関しては、キリスト教絵画のモチーフをみてとる考察がされている。またエイドリアン・ミュニック(Adrienne Auslander Munich)によれば、バーン＝ジョーンズの描くアンドロメダは、キリスト教におけるマリア、イヴの類型であると指摘されている。これらの先行研究をふまえ、原画におけるデザイン画との比較検討を通じて、ペルセウス神話を題材とした一連の絵画に内在しているものについて考察をおこなっていく。